

イスラームの視座から

一 イスラームという宗教

イスラームという言葉は預言者ムハンマドによって広められた宗教の名前であるとともに、アラビア語のひとつの名詞としての意味をもつ。クルアーン(1)のなかでたとえば「イスラーム」という言葉は以下のような文脈で現れる。

本当に神の御許の教えはイスラームである。(inna al-dīn 'ind Allah al-islām Q.3:19)

今日我はあなたの方のために、あなた方の宗教を完成し、またあなた方に対する私の恩恵を全うし、あなた方のため教えとしてイスラームを選んだのである。(al-yawma akmaltu la-kum dīna-kum wa-atmamtu 'alaykum ni 'mafi wa-ra dītu la-kum al-islām dīnan Q.5:3)

鎌田 繁

ここで現れているイスラームの語は宗教の名前としてイスラームと名づけていることを意味すると同時に、「イスラーム」というアラビア語の単語が意味しているものが神の目にかなる人間の態度であることをも意味しているといえる。イスラームの語は大きな力の前に自らの計らいを捨て、その力に完璧に服従することを意味する。すなわち、神の意思にすべてを委ね、それに服従・帰依することを意味する。神の意思に従って生きること、という意味をこのイスラームという語は意味するのであり、この状態を最大限に体現する者もつともすぐれたムスリムである、ということになる。ムスリムとはイスラームという語の能動分詞の形であり、まさに「イスラームする人」、神に従って生きる人、の意味である。

このような宗教にあって、神と人間との関係は主人 (rabb)

と奴隷 (‘abd) の関係で捉えられる。「奴隷」としての人間に
とつてもっとも優れた方方もっとも良く「主人」に仕えるこ
とである。ムスリムが毎日の礼拝時にならず唱えるファーティ
ハ(クルアーン第一章)にも「私たちはあなたにのみ崇め仕え
る」(‘ayyaka na ‘budu) とあり、イスラームという宗教の基本
的性格を規定しているといえるだろう。

ただ、ここで注意すべきは、ここでいう主人と奴隷の関係はあ
くまでも神と人間との間のみ想定されるべきものであって、人
間が別の人間に従属することを許すものではない。むしろ、この
神人の関係を主人と奴隷と捉えることからは、人間が神ならざる
ものを主人として考えることを厳しく排除することが導き出され
る。神以外のものを神と同等に扱うこと、被造物を神とすること
すなわち、多神教 (shirk)、は許し難い罪とみなされる。クルア
ーンにも

本当に神は、(何ものをも) かれに配すること (‘id
yushraka bi-hi) を赦されない。それ以外のことに就いて
は、御心に適う者を赦される。神に(何ものかを) 配する者
は、まさに大罪を犯す者である。(Q:4:48)

【前略】凡そ神に何ものかを配する者 (man yushriku
bi-‘ilāh) には、神は楽園 (に入ることを) を禁じられ、かれ
の住まいは業火である。(Q:5:72)

と記されており、神を相対化する多神教は許し難い罪として、こ

れを犯した魂は火獄に落とされることが運命づけられる。人間の
次元を超えた超越的な存在である神のみに仕えるという視点から
は、超越的な高みにある神とはなんの類似性もなく、同類である
人間の間には完全な平等性がある、ということでもある。

神の意思に従って生きるのがイスラームという宗教の眼目であ
る。これを体現するためには、何を神は人間に対して望んでいる
か、どのようなことをすべきであると神は意思しているか、を人
間は知る必要がある。神の意思を知ることなく、神に従うことは
成立しないからである。神の意思を示しているもののおかげで、
もっとも確実に神の意思を表現しているものは、神自身が語った
言葉であろう。イスラームの文脈のなかでは、クルアーンという
テキストがまさにこの神自身の語った言葉となる。神の意思を
もっとも直接的に知ることができるのがこのクルアーンのテキス
トである。その意味で、神の意思に従って生きることは、クルア
ーンの教えるものに従って生きる、ということになる。そのため、
クルアーンを読み、それから人間が従うべき規範を引き出すこと
がムスリムにとってきわめて重要な営みとなる。クルアーンのテ
キストを正しく理解し、場合によっては補充するものとして、預
言者ムハンマドが語ったり、行為したり、承認したりしたことが
規範として意味をもってくる。九世紀以降、預言者ムハンマドの
さまざまな言行録(ハディース)が編纂され、クルアーンに次ぐ
第二の聖典の意味をもってくる。イスラームという宗教は、これ

らクルアーンに体现された神の言葉や、ハディースに表れる預言者の範例（スンナ）から神の意思を理解し、それに基づいて人間の生き方を組み立てる宗教であるといえるだろう。

イスラームは人間の生き方全体が神の意思に合致することをねらうものであり、人間の一局面だけ、たとえば肉面的精神面だけ、あるいは外的な行動だけで済むというものではなく、人間の活動するあらゆる領域がすべて神の意思に従って統合されること、が要請される。イスラームは政教一致であるといわれるが、政治の領域も我々が通常「宗教」の領域と考えるものも、どちらも人間の活動のひとつの領域であり、その限りで、宗教の領域同様に、政治もまたイスラームの教えを体现するような形で行われることが要請される。この意味で政教一致であるといえることはできるだろう。聖俗の区別がない、ともいわれる。巡礼などの宗教儀礼には、聖俗の区分が意味をもつ面も見られるように思うが、基本的には、宗教儀礼において神の意思の体现を見ると同様に、われわれにとつては俗なる領域であると思える遺産相続や売買契約など一般の社会生活上の問題も、神の意思に従うという形式がもとめられる。その意味でわれわれが俗なる領域の問題と考えることについても、いわゆる宗教儀礼についてと同様の手法をもちいて規範を導き出していく。人間の活動すべてが神の意思に従うことがイスラームのねらっていることであり、礼拝その他の宗教儀礼も日常の社会生活上のさまざまな取り決めも人間の活動の一部である以

上、神の意思に基づく規範に従わなくてはならないと考えるのである。

人間のもつあらゆる局面で人間は神の意思に従った生き方をすることを要求するのがイスラームである、という意味で、イスラームは全人間的宗教であると呼ぶことができる。クルアーンのかなには人間が実践すべき規範がさまざまな表現で示されている。

天が、微塵に裂ける時

諸星が散らされる時、

諸大洋が溢れ出される時、

墓場があばかれる時、

それぞれの魂は、既にしたことと、後に残したことを知る。

人間よ、何があなたを恵み深い主から惑わせ（背かせ）たのか。

かれはあなたを創造し、形を与え、（均整のとれた体に）整え、

かれの御心の儘に、形態をあなたに与えられた御方である。いや、あなたがたは審判を嘘であると言う。

本当にあなたがたの上には二人の看守（天使）がいるが、かれらは気高い記録者で、

あなたがたの所行を知っている。

敬虔な者は、必ず至福の中にいる。

罪ある者は、きつと火の中にいて、

審判の日、かれらはそこで焼かれ、

そこから、逃れられない。(Q:82:1-16)

と人間の創造とともに終末の復活と裁きを不気味なイメージをともなつて伝える言葉が見られると同時に、以下のように遺産相続の具体的な分割方法を述べたりもする。

神はあなたがたの子女に就いてこう命じられる。男児には、女兒の二人分と同額。もし女兒のみ二人以上るときは遺産の三分の二を受ける。もし女兒一人の時は、二分の一を受ける。またその両親は、かれに遺児のある場合、それぞれ遺産の六分の一を受ける。もし遺児がなく、両親がその相続者である場合は、母親はその三分の一を受ける。またもしかれに兄弟がある場合は、母親は六分の一を受ける。(いずれの場合も) その遺言したものと、債務を清算した残り(の分配)である。あなたがたは自分の父母と自分の子女との、どちらがあなたがたにとって、より益があるかを知らない。(これは) 神の掟である。本当に神は全知にして英明であられる。(Q:4:11)

神が人間のすべての局面にたいして規範となる指針をクルアーンという一冊の書物のなかで直接的にあるいは間接的に与えると考えられており、その指針をそのなからくみ取り自らの生き方とすることがムスリムに求められているのである。クルアーンのなかでイスラームという語を用いてはいないが、それと同じ意味で理解できる *bihi* (敬虔、正しく仕えること) という語の説明は

イスラームの宗教の姿をよく示しているといえるだろう。すなわち、

正しく仕える (*bihi*) ということは、あなたがたの顔を東または西に向けることではない。つまり正しく仕えるとは、神と最後の(審判の)日、天使たち、諸啓典と預言者たちを信じ (*amana bi……*)、かれを愛するためにその財産を、近親、孤児、貧者、旅路にある者や物乞いや奴隷の解放のために費やし、礼拝の務めを守り、定められた喜びを行い、約束した時はその約束を果たし、また困苦と逆境と非常時に際しては、よく耐え忍ぶ者、これらこそ真実な者であり、またこれらこそ主を畏れる者である。(Q:2:177)

ここで示されているように、神や預言者などを心のなかで真実のものであると受け入れ、神によって定められた行いを心をこめて実践すること、このように精神と身体という人間の全体で、神の意思に従って生きていくことがイスラームという宗教の目指しているものである。

二 イスラームにおける信

上で見てきたように、イスラームにあっては人間の全局面が神の意思に従うことが基本であり、もしも人間の活動を外的身体的側面と内的精神的側面とに分けて考えるならば、その両面において人間は神に従うことが要請されることになる。「信」あるいは

「信仰」という日本語は、仏教用語としてもキリスト教的な意味あいでも、内面的、精神的な面を第一義的には指し示しているように思う。その意味では、この「信」という語は、身体的な行動を規制するような側面を含まないという点で、イスラームの宗教の要請する全体の半分しか示していない、ということができよう。

イスラームの文脈でこの「信」あるいは「信仰」にもっともよく対応するアラビア語はイーマーン (iman) という語である。これは何かを正しいと考える、承認する、を原義としてもつ。この語は動詞の原形の形 (マスダル) でクルアーンに四六例あり、さらにこの語から派生する動詞や名詞も数多い。この語の能動分詞形ムウミン (mu'min) は信仰者という意味でムスリム (muslim) という語とはほとんど同義で用いられる。

この語は amana bi-…… という前置詞 bi をともなう動詞形で「以下を信じる」という意味で用いられる。クルアーンのなかでこの信仰 (イーマーン) の対象として現れるものには以下のようなものがある。

神と最後の日 2:8, 2:62, 4:39, 5:69

神、我らに下されたもの、イブラーヒームに下されたもの

2:136, 3:84

神、最後の日、天使たち、諸啓典、預言者たち 2:177

神から下されたもの 2:285

神、天使たち、諸啓典、使徒たち 2:285

神と最後の日 9:18

お前たちの主 (神) 36:25

万世の主 7:121, 26:47

ハールーンとムーサーの主 20:70

神と使徒 24:47, 4:136, 4:152, 7:158

主のしるし (ayat) 7:126

神の下した啓典 42:15

我らに下されたもの、お前たちに下されたもの 29:46

使徒たち 5:12

神と、下僕にくだしたものの (啓示) 5:59, 8:41

神 3:3, 10:84, 29:10, 40:84

虚偽 (batil) を信じ神に背く (kafaru) 者 29:52

クルアーンでの表現はさまざまであるが、否定的な意味合いで語られている「虚偽を信じる」というのを除くと、ここで信仰対象になっているのは、神、預言者、天使、啓典、最後の日に集約される。先に引用したクルアーンの一節「神と最後の (審判の) 日、天使たち、諸啓典と預言者たちを信じ (amana bi-……)」という部分にこれが示されている。このことはイーマーンは人間の内面的精神面に関わるということができようであろう。すなわちイスラームという宗教が人間の全局面を覆うものであるのに、その中核的な内面性にかかわるのがイーマーンであるといえるだろう。

う。この文脈で考慮できるのが以下のクルアーンの言葉である。

砂漠のアラブたちは、「わたしたちは信仰(Iman)します。」と言う。言ってやるがいい。「あなたがたは信じてはいない。ただ『わたしたちは服従しました(Islamat)』と言いなさい。信仰(Al-Iman)はまだあなたがたの心の中に入っていない。もしあなたがたが、神とその使徒に従う(fuṭū)なら、かれはその行いに就いて、少しも(報奨を)軽減されることはない。本当に神は寛容にして慈悲深くあられる。(Q.49:14)

ここではムハンマドたちの都市に居住するアラブと対比して砂漠の遊牧民たちの信仰のあり方に触れている。遊牧民たちは過酷な砂漠の環境のなかで生きる知恵としてその場その場での状況に応じて都合のいい側につくという。神への深い信仰ではなく、ムハンマドの陣営につく方が利益が多いと判断して去就を決めるような人たちであるという。このような砂漠のアラブはイーマーンをもっているというが、そうではなく、単にイスラームをもっているだけであり、心のなかにはイーマーンはない、とクルアーンは述べるのである。だが、神と使徒に従っているかぎり、報いを減らされることはない、すなわち、樂園に入ることはできる、ということであろう。ここでは、心のなかの信仰としてイーマーンを捉え、外面的な信仰のあり方、神や預言者の言葉に従った行動をとること、をイスラームと表現していると考えられる。

クルアーンに次ぐ宗教上の意味をもつ預言者ムハンマドの伝承(ハディース)に信仰(イーマーン)に関する以下のような言葉がある。そのなかでは最終的には啓示を伝える役割を果たす天使であるジブリール(ガブリエル)と預言者ムハンマドとの対話であることが明かされる。

ひとりの男がそこに来てこういった。「神の使徒よ、イーマーンとは何ですか」これにたいして使徒は、「神とその天使たち、啓典、(最後の審判の日に)神にお会いすること、その使徒ら、そして来世における復活(al-ḥayāt al-ākhir)を信仰することです」と答えた。

彼はさらに「神の使徒よ、イスラームとは何ですか」と問うた、使徒はこれに対して次のように答えた。「イスラームとは神のみを崇拜し(taḥūda Allāh)、神以外いかなるものをも拜さぬ(ā yushrika bi-ḥi)こと、義務として課せられる礼拝を行い、定めのカートを提供し、ラマダーン月の断食を守ることを意味します。」

質問者はさらに続けて「神の使徒よ、善行(イフサーン)とは、どのようなことですか」と問うた。使徒は以下のように答えた。「神をあたかもあなたの目前に座すかのように崇拜することです。たとえあなたが神をみることができなくても神はあなたをみておられるのです。」(以下略)

……使徒は、この折り、「あの方は、人々に宗教(Al-Ḍīn)

「について教えるため来られたジブリールなのです」といわれた。(アブー・フライラの伝えたもの)³⁾

ここではイーマーン・イスラーム・イフサーンの三つの段階から宗教信仰の諸相を示している。先に引いたクルアーンの言葉と対応させて理解することができると思われるが、イスラームは身体的な外に現れた行為という面が強いのに対し、イーマーンは正しい信仰対象を認めること、内心の信仰の内容を規定しているといえるだろう。イフサーンは神学や教義学ではあまり大きな議論とはされないようであるが、神秘家が内面的な神信仰のあり方を議論する際に言及したりしている。これら三つの段階は重なる面もあるが、イスラーム、イーマーン、イフサーンの順で人間の信仰のあり様が身体的外面的な状態から精神的なより深い内面的な次元のものを指し示しているといえるだろう。

イスラームという宗教にあって人間が目的としている究極的な救済は、神の終末における審判を経て、成功裏に楽園にはいることであるということが出来るだろう。クルアーンのなかにはどのような者が楽園に入るか、さまざまに述べられている。そのなかで特徴的な記述は、楽園にはいるためには信仰と善行のふたつを並列させていることである。たとえば、

神は、信仰して善い行いに勤しむ (amanū wa 'amiū

al-sālihat) 者を、川が下を流れる楽園に入らせられる。

(Q.22:14)

という。このような信仰と善い行いと二つを、いわば車の両輪のようにして神の最高の報酬への手だてとする。同様の記述は7:42-43, 10:9, 22:23, 22:56, 85:11に見られる。そのほか、楽園へ行くという記述ではないが、「神を懼れ信仰をもち (amanū) 正しい行いをすれ ('amiū al-sālihat) ば、心配ない。」(Q.5:93)、「信仰し行いを正しくする者 (man amana wa-salaha) は恐れることはない」(Q.6:48) というように、「信仰と正しい行為をするならば、最後の審判について恐れたり心配したりすることは無い、という記述もある。このように信仰と正しい行いと二つの面を実現することが究極的な救済に至る道ということになる。

イスラームの教説について一般に六信五行というまとめかたで説明が行われる。すなわち、六信は信仰すべき六つの対象を列挙したものであり、神、天使、啓典、預言者、終末、天命を指し、五行は実践すべき行為を五つ数えたものであり、信仰告白、礼拝、齋戒(断食)、救貧税、巡礼を指す。内心の信仰の対象と実際に行うべき行為という二系列の項目をあげており、これはクルアーンに出てくる信仰と正しい行為との二つを体现することが救済に預かる条件であるとする表現を具体的に述べたものと考えられ、イスラームの何であるかを適切に述べているものであると評価できらるだろう。

ところで、信、信仰にあたるイスラームの言葉としてはイーマーンという言葉が該当することはすでに述べた。クルアーンに

あつてはその言葉はしばしば、正しい行為と対に用いられ、その場合は、身体的実践と対比される意味あい、心のなかにうまれる信仰を指すと考えられるだろう。しかしながら、クルアーンの用語法、あるいはイスラーム思想の表現においても時に当てはまるように思うが、一つの語がつねに分析的に同一の概念内容をもつものとして用いられるとは限らない。井筒俊彦が指摘していることであるが、先の砂漠のアラブたちの心のなかにイーマーンは入っていないというクルアーンという言葉（Q:49:14）では、確かにイーマーンが内面的な局面を表しており、イスラームが身体的な実践的な局面を指していると考えられる。これは、とくにこの文脈においてはイーマーンとイスラームとが並列的に対照されて表現されているため、ふたつの用語が異なる意味内容をもつことになっている、ということが出来る。

このような並列的表現がされていない場合はどうであろうか。たとえば、

神は、男の信者にも女の信者 (al-mu'minina wa-al-mu'minat) にも、川が永遠に下を流れる楽園に住むことを約束された。(Q:9:72)

というクルアーンという言葉では、男女の信仰者たち（イーマーンをもつ男女の者たちという意味）は楽園に入る、ということをおいており、楽園に入る条件はイーマーンをもつ者である、という意味にとることができる。しかし、先に引用したクルアーンという言葉

(Q:32:14など) では楽園に入る条件は信仰（イーマーン）と正しい行為とである、とのべていた。このことから、楽園に入る条件は信仰のみ、あるいは信仰と正しい行為の両方、という二つの「矛盾」する考えがクルアーンには見られる、と結論づけることができるかもしれない。しかし、イスラームという宗教の全体像から考えると、楽園に入るといふ救済の実現は全人間的観点から達成されるものだと考えられるので、むしろ、ここ（Q:5:2）でのイーマーンは砂漠のアラブたち（Q:49:14）のイスラームの面をも包含したものであると考えるのが適切であろう。すなわち、イスラームと対比的に用いられればイーマーンは内面的な信仰の面を指す、ということはできるが、単独で用いられる場合には、内面および外面的な信仰の実現を指し示すということがいえるのである。

イスラームの宗教にあつては、内面的精神的な局面、外面的身体的局面、その両者を包み込んだ全体が救済を実現する主体を形成している。一般的な用い方として信あるいは信仰という日本語は基本的な含意として内面的精神的な側面に力点を考慮するようには思われる。このような点から他の宗教との対比を考慮すると、信あるいは信仰にもっとも相応しいイスラームの用語はイーマーンというアラビア語であろう。クルアーンのテキストのなかでは、このイーマーンの語のふくむ意味内容は文脈によって微妙にその広がりや異にしている。しかし、内面的精神的なものを核として

もっており、場合によって身体的局面にまで広がることもある、という点において、もっとも信に相応しい語であろう。後に六信としてまとめられる信仰対象のほとんどがクルアーンにあって、イーマーンの対象として数えられている。イーマーンという語が身体的実践の側面とは別の内心の信仰を一般的に指示しているかどうかは、発話の文脈によって異なるかもしれない。だが、イーマーンという語で表現するかどうかとは別に、内心の信仰だけではイスラームという宗教の全人的な信仰のあり方を覆うことにはならない、という点だけは指摘しておきたい。

- (1) 本稿ではクルアーンの訳文は日本ムスリム協会発行『日亜対訳注解聖クルアーン』昭和五八年第二版に基本的によっているが、「アッラー」を「神」に置き換えた。
- (2) ハディースの意義については、鎌田繁「新イスラーム講座二 ハディース」、『イスラム世界』第三九/四〇号（一九九三年三月）、九五―一〇〇および「座談会 『ハディース』をめぐって」、『イスラム世界』第三九/四〇号（一九九三年三月）、一一一―一二五参照。
- (3) ムスリム編／磯崎定基・飯盛嘉助・小笠原良治訳『日訳サヒーフ・ムスリム』日本サウディアラビア協会、昭和六二、第一巻、二九―三〇頁。訳文を一部改めた。アラビア語テキストは *Muslim, Ṣaḥīḥ Masīn (Jamī Jawāmi' al-Aḥādīth wa-al-Asānīd Maknaw al-Ṣūḥāb wa-al-Sunan wa-Masānīd)*, *Thesaurus Islamicus Foundation*, 2000, Vol.1, pp.24-25, No.106.
- (4) Toshihiko Izutsu, *The Concept of Belief in Islamic Theology*, Tokyo, 1965, pp.79-80 でイブン・タイミーヤに基づいて指摘して

いる。

（かまだ・しげる、イスラーム思想、

東京大学東洋文化研究所教授）